「本は、もちろん、人に繋がる」
—アイリス・マードックとスーザン・ヒルの交点—

河　内　恵　子

多彩な作品世界を創るスーザン・ヒルは現代のイギリスを代表する小説家だ。2009年に出版した『踊り場の「ハワーズ・エンド」』は、ヒルが自らの読書体験を記録したきわめて面白いエッセイである。因みに、「本は、もちろん、人に繋がる」とは彼女がエッセイ中で発する言葉だ。

話はこうだ。読む必要がある本を探し始めたヒルは、その本を見つけることができない。持っていることは間違いないし、自宅のどこかに置いてあるのも確かなのだが、なかなか見つからない。

ここにあると確信していた場所には、持っていることさえ忘れていた他の本が鎮座していた。目的の本を求めて作家は自宅を探しまわる。さまざまな書棚、階段の踊り場、屋根裏部屋。ありとあらゆる場所を探索する過程でヒルは本たちと再会する。所有していることさえ忘れていた本もあれば、もう一度是非読みたいと願っていた本もある。もう二度と読まなくて構わないと即座に判断できる作家もいれば、出版年代順に丁寧に読み返したいと思う作家もいる。そこで彼女は家中の書物を見直すことで「これまでの人生で読んできた書物」と向き合うことを決意する。「自分の本を取り戻す」ことを心に決めるのだ。副題「家庭での読書、一年」が示すとおり、一年間のあいだ、新しい本は購入せず、自宅にある蔵書を徹底的に整理する。この道程で書かれたのが、『踊り場の「ハワーズ・エンド」』である。

アイリス・マードックの作品との出会いについては「下降と上昇？」という章で語られている。「現在は、作家が亡くなった後ではよくあることだが、マードックの人気は落ちていて、その作品はほとんど忘れられている…この忘却の時間はどれくらい続くかわからない…彼女の作品は新しい読者層によってまだ評価されていない。どの作家が永久に埋もれたままで、どの作家が浮上して新たに評価されるかはわからない」と厳しい現実に触れた後、自宅の居間に置いている「好きで選んだ」マードックの小説を紹介し始める。

最高傑作の『鐘』、ブッカー賞を受賞した名作『海よ、海』、そして初期の作品である『砂の城』『網のなか』『誘惑者から逃れて』は歴史に残るとヒルは予言し、これらの小説の冒頭部分の美しさを讃える。また、多くの批評家がマードック文学の哲学や倫理的目的を強調してきたが、彼女の作品には人間の尊大さや野望をコミカルに描くユーモアがあったと述べる。その小説世界には、ディケンズやハーディに通じる、多くの登場人物を操作する技量があったというのだ。

1980年代前半にスーザン・ヒルがアイリス・マードックにラジオ番組でインタビューして以来、ふたりのあいだには淡い交わりはあったが、それも時とともに途絶えていた。最後にふたりが出会うのは、ヒルがオックスフォードで自著のチャリティ・サイン会を行っている時だった。ほとんど10年ぶりに会ったマードックはすでに病んでおり、ヒルが懐かしさのあまりその両手をとると、「困ったような眼差しで、何かきっかけを探すかのようにじっと私の眼を見つめていた」。ところが、突然、マードックの眼が強く、明るく輝き、ヒルの手をぎゅっと握りしめたのだ。一瞬の認識の時だった。彼女はこう書いている。「私は彼女に感謝したかった。彼女が誰で、多くの熱心な読者にとってどれほど大きな意味をもつ存在であるかを、彼女自身に思い出してもらえるようなことを言いたかった」。しかし、言葉は見つからず、マードックの眼は暗くなっていった。

スーザン・ヒルはマードックの作品を出版年代順に並べ、どれも手放さないと決意している。作品群はアイリス・マードックという天才作家を表すひとつの物語なのだから。

マードックについて書かれた本はさまざまな彼女を伝える。激しい情熱をみせる若き日のアイリス、哲学者、愛人、著名な小説家等。そのどれもが真実なのだろう。スーザン・ヒルは彼女自身が知っていたマードックを「誇りと敬意と無類の愛」をもって記憶にとどめておこうと章の最後に語る。

ふたりのすぐれて魅力的な作家の出会いを知ることは、読者の私にとって重く、それでいて、奇妙に愉しい体験だった。

（会員）